



非日常の旅へ、  
さあ、乗り込もう！



発見して



堪能して



観察して



夢を見て



# ロワール川から世界遺産を楽しむ水上の旅 ソミュール・ロワール

ソミュール・ロワール へ ようこそ!

楽しいクルーズにするため、以下にご注意ください。

- ・出発、到着の際は必ずご着席ください。
- ・手すりには寄り掛からないでください。

※なお、運航中の前方後方への移動はご自由にしていただけます。

ソミュールエリアを含む、シュリー＝シュル＝ロワール (Sully-sur-Loire) からシャロンヌ＝シュル＝ロワール (Chalonnnes-sur-Loire) までのロワール渓谷は、「長い年月をかけて人々が作り上げた生活基盤と、美しい豊かな自然が調和した、極めて優れた文化的景観」として、2000年、ユネスコ世界遺産に登録されました。ラカンパニー ソミュロワーズ ド ナヴィガシオン サンニコラ (La Compagnie Saumuroise de Navigation Saint Nicolas) がお届けする、船から眺めるソミュールの町とこの素晴らしい景観との融合を、どうぞごゆっくりとお楽しみください。

## 要塞の町、ソミュール

15世紀のソミュールの町は完全に壁に囲まれていました。「ソミュール」という名前は、ラテン語の「salvus murus (壁に守られた)」という言葉から来ていると考えられています。市庁舎の左翼側 (皆様がお乗船された埠頭のすぐ上) にこの要塞の名残があることが確認できます。この部分は15世紀当時、町全体を取り囲んでいた壁の一部で、橋の防衛を強化するため設計されました。(旧大橋の一部はロワール川の中に残っており、川の水位が低い時のみ見ることが出来ます。)このような要塞の痕跡は他にも点在しています。ソミュール城の下部にある円柱の塔、パプゴルトタワー (la tour Papegault) もその一つです。



市庁舎

要塞の中心であったソミュール城 (le château de Saumur) は、「ベリー公のいとも豪華なる時祷書」(中世に作られたキリスト教の書)の挿絵として使われ、後世に残ることになりました。城自体も壁に囲まれたソミュール城のその役割は、ロワール川の往来を監視し、重要拠点の確認・防衛をするためでもありました。2001年4月22日の夜、この城壁北側の一部が突然崩壊しました。城壁はトゥフオ石 (Tuffeau, アンジュー地方特有の石灰岩) で作られており、雨水の浸潤によるものであったとされています。この崩壊部分は7年の歳月をかけ、耐久性を高めるためコンクリートにより再建され、城の景観、美しさを維持するために表面をトゥフオで覆い修復されました。

## 宗教改革 - プロテスタントにとっての「安全な場所」



ソミュール城

ユグノー戦争 (カトリックとプロテスタントの内戦) を終結させるため発令された1598年のナントの勅令で、フランス国王により100の「安全な場所」がプロテスタントに与えられました。多くの安全な場所のうち特にソミュールは、知事であったデュプレシス・モルネーの計らいでプロテスタントの駐屯地となり、ソミュールの要塞としての機能はこの時期に強化されました。

「ユグノーの教皇」と呼ばれたデュプレシス・モルネーは、この砦に居住していたこともあり、このソミュールをジュネーブのような、ヨーロッパ全体におけるプロテスタント主義の拠点とすることを望んでいました。このことから、城壁へ繋がる小道は「プチ・ジュネーブの坂」(Montée du Petit Genève) と名付けられました。ナントの勅令によって付与された数ある安全な場所のなかでも、ソミュールは真のユグノー (プロテスタント) の核となりました。特にプロテスタントアカデミーが設立されたことで、この町はプロテスタント主義のエリート育成を担いました。ソミュールで2年間履修したウィリアム・ペン (William Penn) が、その20年後、ペンシルベニア州を設立する人物となるなど、多くの著名人を排出しました。

ところが、ノートルダム・デ・アーディリエール教会 (Royal Chapel Notre-Dame des Ardilliers) のあるフネ地区 (Quartier du Fenêt) は、ソミュールの町にカトリック教会を建設するための重要な場所となりました。そこには怪我や病気を癒す効果のある温泉があり、15世紀にはアーディレ (ardille) と呼ばれる粘土質の土壌から、ピエタ (pietà: 十字架から降ろされたキリストを抱くマリアの像) が農民により発見されました。これらがカトリックであるマリアン教団の巡業の起源となり、初めてカトリック教会を建設することが許されました。18世紀半ばまでに155の奇跡が起こったとそこに記録されています。17世紀、カトリック教区司教たちは、プロテスタントの場所となっていたこの町を取り戻すため、マリアン教団を手に入れました。1614年には、その聖域の管理はオラトリアン (司祭と同居しながら、説教、教育によって神聖化のために従事する団体) に任せられました。彼らは王立学校、神学校を次々に設立し、後期にはプロテスタントアカデミーと対立することになりました。



ノートルダム・デ・アーディリエール教会

また、建築学的に興味深い点として挙げると、27メートルの高さがあるアーディリエールのロタンダ (ドーム付円形建造物) は、パリにあるアンヴァリッドが建設される前までは、フランス王国最大の建築とされていました。

## ロワール川は野性の川?

1,013kmに及ぶフランス最長の川、ロワール川のその流域面積は、フランス国土の5分の1を占めています。川はフランス中央高地アルデシュ県 (Ardèche) の山、モン・ジャービエール・ド・ジョン (Mont Gerbier de Jonc) から湧き出ています。

「フランス最後の野性の川」とよく表現されますが、ソミュールにおけるロワール川の特徴は、人々が手を加えた部分と、自然のままの場所が混在し融合していることです。例えば、オファール島の先端とソミュール右岸を繋いでいる堤防。これは川の水位が低い時に、水流が枝分かれしていくことを防ぐため、人の手により作られたものでした。それによって川の流れは町の中心部に集中し、自然に砂を掘り水路を作るようになりました。また、列車の鉄橋を過ぎると、川が作り上げた大自然を観察することができる、自然エリアにたどり着きます。ここはロワール・アンジュー・トゥレンヌ自然公園 (Parc naturel régional Loire-Anjou-Touraine) の中心部で、ロワール川本来の姿を楽しむことができます。私たちの右手に見える植生した砂の島 (l'île de sable végétalisée) がこれらの例です。作家ジュール・ルナール (Jules Renard) が「少しの水が流れる砂の川」と例えたように、ロワール川は砂地が多く、洪水や浸食によって数々の島の姿を変えてきました。手が増えられていない島々は野鳥たちが好む理想の場所となっており、アジサシなどは砂の上に直接巣を作っています。

季節によってはロワールの珍しい鳥たちに会えるかもしれません。アジサシ、ツバメ、チドリ、タゲリ、シギ、カワセミ、ユリカモメ、セグロカモメ、小サギ、アオサギ、カワウ、猛禽類、ミサゴなど、またアヒルや蝶、トンボなども飛んでいます。

一方、ロワール川の「野性的、ワイルドな」と表現されるその特徴は、川を航行するのが困難であることも理由の一つです。ロワールの水流は、十分な深さが一年中あるわけではないため、ロワール川のシュリー＝シュル＝ロワールからポン＝ドゥ＝セの区間は航行可能な水路としての認可が下りていません。しかしメヌ＝エ＝ロワール県によって赤と緑のブイが設置され、現在は川の交通が容易になりました。



砂の島

## ソミュールとロワール川 - あらゆることに適した場所

トゥフオの地であるソミュール。トゥフオ (tuffeau) とは、アンジュー地方の岩山から採れる白い石灰岩のことで、白く美しい城や教会の建設には欠かせない、貴重な資材です。劇作家クロードル (Paul Claudel) はトゥフオについてこう言いました。「美しくそして柔らかいこの白い石は、フランスの栄光である。」と。ソミュールの地下には、その岩山を削った1,200kmに及ぶトログロディット (troglodyte: 古代ギリシャ語の穴居、洞窟に由来する) と呼ばれる地下空間があります。この空間は湿度、温度共に年間一定して保たれているので、マッシュルームの栽培、ワインなどの貯蔵、住居などさまざまな用途に利用されています。マッシュルームの栽培は1909年に始まりました。マッシュルームの栽培に不可欠なのが、16°Cの一定した温度、適度な湿度、十分な換気という環境、さらに栄養豊富な馬糞も大切なアイテムです。馬の町でもあるソミュールは、これらすべてが揃った、マッシュルーム栽培にとっても適した場所なのです。スパークリングワインに関しては、19世紀、シャンパーニュ地方のブドウ畑が危機に陥った際に、アンジュー地方、トゥレーヌ地方から追加供給することになり、中でもソミュールから調達するようになりました。このことから、現在でも数々のグランメゾンでソミュールブリュット (スパークリングワイン) が生産されています。丘の上に見えるグラシアン・エ・メイヤー (les caves Gratién et Meyer)、その他にグルネル (les caves de Grenelle)、アッカーマン (Ackerman)、ヴェーヴ・アミヨ (Veuve Amiot)、ラングロワ・シャトー (Langlois-Château)、ブヴェ・ラデュベ (Bouvet-Ladubay) などが有名です。



トゥフオの美しい街並み

また15世紀から18世紀の間、多くの風車がソミュールの丘に作られました。現在は姿を消しましたが、丘の上を通る道は「風車の道」(rue des moulins)と呼ばれており、以前はこの丘に多くの風車が存在していたことがうかがえます。ロワール川から見える最後の風車は、**キャヴィエール風車**(moulin cavier)と呼ばれるこの地方独特の風車で、現在は土台のみが残っています。

これらの風車は3つの部分から構成されています。

- ・ 頭部:翼や駆動軸を動かす部分
- ・ 中央部:石で造られた巨大な円錐塔
- ・ 下部:石臼のある空洞スペース



キャヴィエール風車

## ロワール川から望むソミュール

ソミュールの空にそびえ立つシルエットは城だけではありません。**サン・ピエール教会**(l'église Saint Pierre)の鐘楼も見事です。よく見ると、上に向かって左から右へねじれた形をしており、18世紀に木杵を69メートルの高さまで積み上げて作られました。

さらにソミュールで見逃せないモニュメントと言えば、建築家ジョリ・ルテーム(Charles Joly-Leterme)が19世紀に手掛けた二つの建築物、**市庁舎**と**劇場**です。劇場は2013年にカルチャーセンターとして改築され、現在は劇場としてだけでなく、アート、音楽、ダンスなどが学べる場としても利用されています。

**セサル橋**(le pont Cessart)は18世紀に作られました。中世当時はこの橋に出ると、そこからはソミュールの外とされていました。



サン・ピエール教会

## ソミュールのラ・マリンド・ロワール

セサル橋を過ぎると、ソミュールのまた別のエリアにたどり着きます。サンニコラ地区(le quartier Saint Nicolas)は、同名の教会を中心に構成されているエリアです。サンニコラはロワールの船乗りや漁師たちにとっての守護神であり、この教会は彼らのために捧げられました。**ラ・マリンド・ロワール**(la marine de Loire)と呼ばれるロワールの船乗りたちは、鉄道の開通により衰退する前の、18世紀頃が最盛期であったと考えられています。現在このラ・マリンド・ロワールは消失してしまいましたが、彼らが残した立派な埠頭を見ると、いかに偉大な存在だったかが見受けられます。埠頭と棧橋の数々以外にも残されているのが、セサル橋のアーチ部分に残る、船を引き寄せるための**曳航用リング**です。これは当時、橋の通過が非常に困難だったことを物語っています。また、橋の隅に残る**水位計**は、現在でも水位の変化を示してくれます。ラ・マリンド・ロワールがこのような活躍し、重要な存在だったのは、ロワール川が物資輸送の「王道」だったためです。ロワール川は、トレラゼ(Trélazé)で採れるアードワーズ石の屋根瓦(les ardoises)などの資材や、またスパイスなど異国からの物資の運搬、ワインの輸送にも多く利用されていました。



水位計

## フランス馬術界のトップ、ソミュール

騎兵の訓練がソミュールで行われるようになったのは、前述のデュプレシス・モルネーにより設立されたプロテスタントアカデミーの頃に遡ります。1771年、ルイ15世により兵隊訓練校が設立され、1898年にソミュールの騎兵部隊が、その**新しい制服の色からカドル・ノワール**(黒い高官たち)と呼ばれるようになりました。そしてこのカドル・ノワールは**騎兵訓練校**(l'Ecole de Cavalerie)の中心となりました。その歴史的建物と騎馬たちの厩舎、馬術場は埠頭の後ろ側にあります。

今日でも、カドル・ノワールのチーフはまだ軍士官という立場のままですが、フランスにおける馬術の伝統を不朽のものにした**国立馬術学校**(l'Ecole Nationale d'Equitation)は、1972年からソミュールを出たテールフォー

ルの森に移動し、スポーツ省、農業省の管轄になりました。カドル・ノワールが守ってきた「フランス伝統の馬術」は、2011年からユネスコ無形文化遺産に登録されています。



騎兵訓練校

クルーズはこれで終了いたします。ご清聴ありがとうございました。このクルーズが楽しい旅の思い出の1ページになれば幸いです。アンジュー地方でのご滞在を引き続きお楽しみください。

